

5. ロールシャッハテストから見た境界例 (そのⅡ)

野田 明子・田宮 崇(田宮病院)
乾 吉佑(慶応大学精神
経科)

日常の臨床の中で、ロールシャッハテストは補助診断のための重要な心理検査の1つであると考えます。しかしながら我々は、近年注目されるようになった境界例を R test 上に同定することに困難を感じておりました。このため前回のそのⅠの報告にひきつづいて、今回は、更に R test の診断能力を高める意味から、3年前に慶大テストグループの馬場らが提出した境界例の R test 特徴を追試する形で検討を加え、そしてその際 control 群としてあげた分裂病 (hebephrenic type) との鑑別について理解を深めてみました。馬場らの境界例の R test 特徴については以下のような点であります。Ⅰ. R test の量的資料面における特徴として、①反応が何らかの偏った豊富さを持っている、②決定因の多様さとバランスのなさ、③反応内容において H% がやや高くなること、④現実検討力の低下、Ⅱ. 一次過程思考のあらわれが、①外界認知の障害(漠然とした W 反応や W の「顔」反応が多くみられる)や、②概念構成の障害(逸脱言語表現を伴った反応、中でも作話傾向反応などが多く出現する)が混り合って出現すること、Ⅲとして、境界例特有の原始的防衛機制(原始的否認、分裂、投影、投影同一視、原始的理想化と脱価値化)のあらわれが、①攻撃性を帯びた表象、②理想的表象、③表象の逆転、④形態質の急激な変化、⑤色彩へのかかわり方のむら、⑥分裂した表象となって反応中に出現すること。Ⅳ. 現実検討力が低下しやすいこと。以上の特徴点が、我々の抽出した7例の境界例症例(治療経過から最終的に境界例と診断のなされたもの及び最終診断はなされていないが R test 特徴からみて境界例と思われたものを抽出)と control 群として2例の分裂病症例において、どのように現われているかについて検討を加えてみました。この際、我々は慶大グループの R test 特徴に加えて、それぞれのケースの $\Delta\%$ や BRS, RSS も検討項目として加えてみました。結果としては、7例の境界例群は、馬場らの R test 特徴ともほぼ一致をみる事が出来ましたが、更に control 群の分裂病群とはいくつかの点において、違いが明確になりました。決定因は分裂病群の方が明らかに乏しく、形態質 (R t%) も悪い。Ⅱの R test 特徴である一次過程思考では、分裂病群は外界認知の障害が強く見られるが、境界例群は概念構成の障害の方が優

位で、主観的に意味づけされた強い情緒を伴った作話傾向反応等が多く出現する。Ⅲの原始的防衛機制では、攻撃性を帯びた表象、形態質の急激な変化等の激しい情緒状態や自我水準の変わりやすさが境界例群においてみられ、分裂病群はそれらの特徴は少なく、全体に empty で poor な感じで力に乏しい。Ⅳの現実検討力では分裂病群の方が概して低い。又境界例の中でも、我々の7症例を更に細かく検討してみると、R t%, $\Delta\%$, BRS, RSS のサインなどから、higher level, middle level, lower level のほぼⅢ群に分けられるのではないかといった印象を受けました。

6. 不全型離人症状(離人発作)を呈した 強迫性格者の1例について

茂野 良一(新潟大学精神科)

10余年間に渡り発作性の離人症状(演者はこの現象を「離人発作」と命名した)を反復している症例を呈示し、その病像の特徴を述べ、さらにその離人症状の発作的発現の機序について病前性格の側面から考察を試みた。

症例は現在23歳の男子、大学院生である。小学校高学年の頃より、自分あるいは他人が「物」にしか感じられないという離人感が時々発作性に出現するようになった。当初は単発性に出現していたこの離人感が、大学入学以後、群発性にも出現するようになり、それに伴い発作の持続が延長し、発作間欠期に予期不安も出現するようになった。

本症例の病像の特徴は以下の如く要約される。1. 対象は人間以外の事象に拡がらず、対象が自分の場合には自我意識の内の実行意識の喪失に限定され、対象が他人の場合には有情感喪失として離人感が出現する。2. 発作の起始は突然で、終わり方は緩徐である。持続は大学4年まで数分から数時間であったが、大学院1年の時から10時間近く続く発作も出現するようになった。3. 発作は高校3年まで1年間に数回、単発性に出現する程度であったが、大学1年以後数ヶ月間に渡り群発性に出現するようになった。4. 中学1年の頃より発作時に恐怖感を伴うようになり、発作が群発してからは発作間欠期に予期不安も加わっている。

本症例の病前性格は強迫性格の範疇に入るが、特に自己不確実感、低い自己評価という不安定感を克服、防衛するための思考、感情の自己制御が顕著に認められた。

本症例の離人発作を誘発する直接的契機として、意識的な思考とそれに伴う感情が稀薄化して、ある程度自我から遊離した自生的な思考、感情が前景化している状況